

ベケット研究会第48回例会 発表要旨

2016年12月10日

早稲田大学

宮脇永吏 白の遠近法—ベケットとジュヌヴィエーヴ・アース

1960年代後半～70年代のベケットの散文は、さまざまな画家による挿絵を伴って出版された。演劇という表現形態から映像表現へと移行するこの時期、もともと視覚に訴える芸術である絵画や版画と接近するなかで、執筆言語そのものがある種の「絵画的」な領域に達していたと考えられる。しかし同時に、「すべてが均一な白い閃光を受けて輝く」ような、ほぼ不可視の世界を描いた時期でもあった。本発表では、フランスの画家ジュヌヴィエーヴ・アースとの共作『放棄されたもの』（1971）を足掛かりとしながら、60年代へと遡り、両者の「白の時代」を比較参照することによって、言語表現と絵画・版画という視覚芸術の間で共有された空間の表現方法について考察する。

藤原曜 転移する言葉 —— 「…雲のように…」における朗唱の問題

「彼女のことを考えるときはいつも夜だった」。この一節で始まるテレビ作品…*but the clouds*… (1977) は、「彼女」のイメージの召喚を主題とする作品として、これまで論じられてきた。とはいえ、このイメージの召喚において、「彼女」の唇がイエイツの詩句を沈黙のうちに口ずさみ、また語り手がその詩句を実際に発話することに注目するなら、この作品が「朗唱」を中心に構成されていることが明らかになる。本発表では英語版テキスト、並びにベケット自身の演出による南ドイツ放送版を参考に、この「朗唱」の問題について検討したい。